

WRV NEWS LETTER

WILDLIFE RESCUE VETERINARIAN ASSOCIATION

特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

No.130

2024.9.25 発行



野生動物救護獣医師協会は、保護された傷病野生鳥獣の救護活動を通じて市民の野生鳥獣保護思想の高揚をはかるとともに、地球環境保護思想の定着化を目指しています。そのために、常に世界の情勢を学び、会員相互の連絡、交流を行い、治療、研究および知識の普及をはかり、社会に貢献していくことを目的としています。

No.130 目次

施設紹介ー仙台市八木山動物公園	2-3
施設紹介ーのぼりべつクマ牧場	4-5
令和6年度 油等汚染事故対策水鳥救護研修のご案内	6-7
「第7回コウノトリの生息地を支える市民交流会」開催報告	8-10
戦争で犠牲になる無数の野生生物	11
寄付のお礼	11
事務局日誌	11-12

仙台市八木山動物公園

八木山動物公園 普及調整係長（獣医師）佐藤 純栄

【仙台市八木山動物公園】

八木山動物公園は昭和40年10月15日に現在の地に開園し、来年で60周年を迎えます。仙台駅から地下鉄東西線で13分とアクセスも良く、年間約50万人が訪れる東北最大級の規模を誇る動物園で、約116種544点（令和6年4月1日現在）の動物を飼育展示しています。特に環境生態展示を採用しているアフリカ園では、ゾウやキリン、サイ、カバ、シマウマなどの人気動物が水辺を囲んで一堂に会し、アフリカのサバンナにいるような雰囲気が味わえます。また、アジアの熱帯雨林をイメージしたスマトラトラや、カナダのツンドラを再現したホッキョクグマの展示も人気です。さらに令和3年8月に策定した「施設長寿命化再整備計画」に沿って、園内を3つのエリアに分けて順次リニューアルを進めています。

また、当園では教育普及活動にも力を入れており、「ふれあいの丘」でのヤギ、ヒツジ、ウサギ、モルモットとのふれあいをはじめ、教科書の単元に合わせて19種類用意している「学習プログラム」は、年間約100件3,000名以上の学校や団体等が利用する人気のプログラムとなっています。



アフリカ生態園の様子



学習プログラムの様子

【シジュウカラガンの羽数回復事業】

シジュウカラガンには大きく分けて2つの個体群があり、アリューシャン列島で繁殖してアメリカ西海岸で越冬するものと、千島列島で繁殖し宮城県を中心に日本で越冬するものがあります。江戸時代以前は宮城県の仙台平野に多数見られるガンでしたが、1900年代初頭、世界中で毛皮ブームが広がりキツネの毛皮の商業的価値が高まったことに伴い、シジュウカラガンの繁殖地であったアリューシャン列島や千島列島の島々ではキツネの放し飼いが行われました。これによって卵や雛、換羽期に一時的に飛べなくなる親鳥が捕食され、生息数は激減し、日本へ飛来するシジュウカラガンの個体群は「絶滅した」と言われました。

しかし、1960年代から70年代にかけて、宮城県北部の伊豆沼に数羽飛来したことを受けて、当園ではガン類とその生息地の保全に携わる「日本雁を保護する会」と共同で、シジュウカラガンの羽数回復と渡りの復活に取り組むこととしました。

まず、先にアリューシャン列島の群れの回復に成功したアメリカから、9羽のシジュウカラガンを譲り受けて当園での飼育を開始しました。当園で繁殖した個体の放鳥を1985年から越冬地の宮城県や中継地の北海道で開始し、繁殖地を同じくするマガンと共に北帰することを目指しましたが、十分な成果は得られませんでした。

ガン類の生態的特性として、「初めて飛翔を覚えた地域を繁殖地と認識する」「渡りの経路は学習によって覚える」といったことが知られており、これらの特性から、繁殖地での放鳥がより効果的であると考えられましたが、繁殖地の千島列島がある当時のソ連とは、政治的な壁により現地での共同事業が展開できない状態でした。しかし、1991年にソ連が崩壊して政治体制が変化したことを契機に、1992年に日ロ米共同事業が合意され、1994年から仙台市、日本雁を保護する会、カムチャツカ生態学

研究所の3者による共同事業が始まり、千島列島での放鳥が可能となりました。当園で親鳥となる個体を育ててロシアに送り、カムチャツカの繁殖施設で繁殖させて孵化した若鳥を、旧来の繁殖地である千島列島のエカルマ島にヘリコプターで空輸して放鳥するという計画で、渡りの復元と野生個体数の増加を図るのがねらいでした。

1995年から2000年までの6年間で119羽の試験放鳥を行い、毎年年齢構成を変化させて放鳥して検討していく中で、渡りを促すには飛翔経験の乏しい2歳未満の個体を、より大きい群れで放鳥する方が効果的であると分かってきました。2002年からは本格的放鳥として、2歳以下の若鳥を50羽程度の大きな群れで放鳥し、事業全体では合計13回、551羽を放鳥しました。(写真1)



写真1 エカルマ島での放鳥

その結果、2005年冬に11羽の標識個体が飛来したのを契機に、日本への飛来数は大幅に増えていき、2007年冬には4羽の標識個体が7羽の幼鳥と共に飛来して、日本への渡りが次世代へ引き継がれていることが確認できました。2014年の冬には、日本に飛来する群れが自立的回復の目安となる1000羽を初めて超え、2017年の冬以降は5000羽を超える群れが日本に飛来するようになりました。

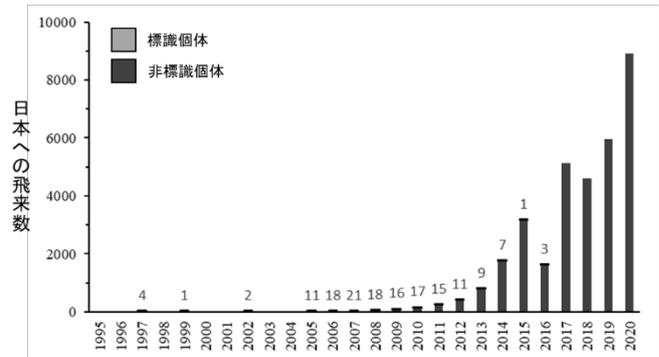
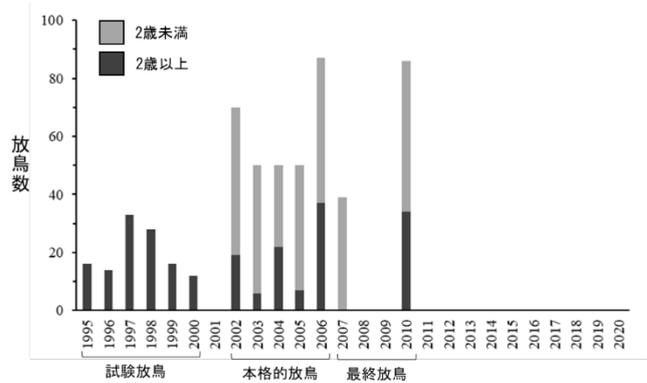
さらに、2021年にはかつての越冬地である七北田低地（仙台市、多賀城市）にも数羽が飛来したのが確認されました。こうして事業開始から約30年をかけて、シジュウカラガンの渡りは復活したのです。(図1)

【今後の展望】

当園の放鳥事業は終了しましたが、生息域外保全として全国の動物園で飼育されているシジュウカラガンの血統管理を行いながら繁殖に取り組み、個体数を維持しています。(写真2)

また、教育普及活動の一つとして、シジュウカラガンがどんな鳥なのか、なぜ減少したのか、羽数を増やすためにどんな取り組みがあったのかを学べる学習プログラムを行い、渡り鳥や湿地の重要性について普及啓発をしていくことにより、生息地の保全に寄与していきたいと考えています。

さらに、「施設長寿命化再整備計画」エリアⅢにおいては、シジュウカラガンなどの渡り鳥とその越冬地である湿地の重要性について伝える施設の建築を計画しており、来園者がガン・カモ類の休息地である湿地の保全に、気軽に参加できる仕組みを取り入れた学習効果の高い展示を目指します。



※棒グラフ上の数値は標識個体の飛来数を示す

図1 エカルマ島での放鳥数と日本への飛来数
(日本雁を保護する会)



写真2 当園で繁殖したシジュウカラガンの親子

のぼりべつクマ牧場

のぼりべつクマ牧場 獣医師 萩野 恭 伍

【のぼりべつクマ牧場について】

のぼりべつクマ牧場は、北海道の南西部に位置する登別市の温泉街にある観光施設です。支笏洞爺国立公園内にあり、周囲は自然に溢れ、日本屈指の透明度を誇る倶多楽（クッタラ）湖や爆裂火口痕である地獄谷があります。ロープウェイで結ばれた標高 550m の山頂でエゾヒグマの他、アヒルやエゾリス等を飼育しています。

のぼりべつクマ牧場は 1958 年に開園しました。北海道の象徴であるヒグマと、そのヒグマが暮らす北海道の自然を見せたいとの思いから、母グマを失い保護された、8 頭のこぐまを引き取る形で飼育展示を開始しました。その後 1966 年に初めての繁殖に成功し、その後は年々飼育頭数が増加していき、日本各地に存在するクマの集団飼育形態（クマ牧場）施設の先駆けとなりました。2024 年現在は、67 頭の個性あふれるヒグマを飼育しております。

施設内には、ヒグマに関する情報に特化した「ヒグマ博物館」、より間近にヒグマを観察できる「ヒトのオリ」、クッタラ湖や太平洋を望むことが出来る「展望台」や、アイヌ文化を伝える「ユーカラの里」などがあります。

またイベントとして、ヒグマの探査行動を通じて身体能力を紹介する「クマのアスレチック」や、ヒグマの食性や学習能力を紹介する「クマの腕試し」などがあります。

近年はアニマルウェルフェア向上に向けた取り組みにも力を入れており、牧場で過ごすクマたちの環境を、少しでも良く出来るように日々努力を重ねております。

今回は、のぼりべつクマ牧場における野生個体の保護状況や、道内で近年軋轢が増しているエゾヒグマとの共生に向けた取り組みについて紹介します。



展望台から望む倶多楽湖



迫力ある姿を間近で観察できる「ヒトのオリ」



身体能力を紹介する「クマのアスレチック」

【のぼりべつクマ牧場における野生エゾヒグマ保護収容】

当園では開園から現在に至るまで、散発的に各地域で保護された野生動物（エゾヒグマ、ニホンツキノワグマ、エゾリス、エゾモモンガ、エゾシマリス等）の受け入れを行ってきました。エゾヒグマにおいては、1960 年時点で計 28 頭、1964 年以降は計 20 頭保護し、かつてはペットとして個人宅で飼育されていた個体を引き取ることもありました。保護に関しては、原則野生動物は野生のまま、人の手は加えないことが理想であり、一度収容した後に生息地に返すことは現状出来ないため、相当な理由がない限り、積極的な実施はしておりません。特に 1 歳以上になると、集団生活をする上で重要な社会性の構築が難しくなり、他個体や飼育員に対する警戒心や攻撃性が増し、安全性の担保が困難となります。結果として、管理上の制限が大きくなってしまい、当該個体にかかる負荷も大きくなってしまいうため、受け入れが難しい状況があります。

一方、当歳グマであり、親グマの存在が確認できないか、あるいは人為的背景による遺棄と判断され、自力での生存が困難な状況であること、また生息地内への放獣が不可であり、保護以外の選択肢がなく、管理獣舎等の確保など、当園での受け入れ体制が整っていることなどの条件が揃えば受け入れることがあります。野生個体を受け入れることで、新たな血統の確保に繋がるため、繁殖管理においては非常に重要な存在となります。また、教育普及の面においては、クマとの共生について伝え考



日高町で保護された「タカオ」（写真手前）



「タカオ」に寄生していたフタトゲチマダニ (*Haemophysalis longicornis*) とみられるダニ

える上で、より高い効果を得ることも期待できます。

保護収容における獣医学的な管理としては、野外からの受け入れに伴う感染症や外部寄生虫などの持ち込み予防のため、搬入時には身体検査等を実施し、ダニなどの駆虫などを行います。その後は行動や状態をモニタリングしながら健康管理を行っていきます。

【エゾヒグマとの共生に向けた取り組み】

近年、市街地へのクマ出没事例が増加し、許可捕獲頭数も年々増加しています。メディアに取り上げられる機会も増え、関心が高まっている中、2024年4月には新たに、北海道のヒグマおよび四国を除く本州のツキノワグマが「指定管理鳥獣」に指定されました。

エゾヒグマは基本的に野生下では警戒心が強く、人との遭遇をヒグマの方から避けます。被害が生じる原因としては、山菜採りなどにおける至近間での突発的な出会い、こぐまを守るための威嚇攻撃行動、人の居住地域への誘因（生ごみの放置や過疎化に伴う果樹園や畑の放棄）、年齢や個性による人や環境に対する好奇心、強い執着心などが挙げられます。こうした被害の発生をなくすため、北海道ではヒグマ管理計画が策定され、棲み分けとしてゾーニングの考えが広まっております。当園における共生に向けた取り組みとしては、主として教育普及と研究があります。教育普及としては、クマの持つ学習能力の高さや鼻の良さ、力強さなどを来園者に伝えるイベントや、来園者や修学旅行生に向けたヒグマの生態などの解説を実施してきました。一方、大学等の外部機関と共同でヒグマに関する様々な研究にも力を入れております。これまで実施してきた研究の例としては、音に対する忌避効果や匂いに対する反応、血液や体毛に含まれるDNAを用いた年齢推察、繁殖生理や人工授精に関する研究などが挙げられ、こうした研究の蓄積が直接的あるいは間接的に、人との軋轢を軽減させることに寄与できると期待しております。

昨今ヒグマによる被害等の情報が増えている中で、クマに対して恐怖のイメージがつきやすい状況かと思えます。確かにクマには怖い一面もありますが、他にも賢さや可愛らしさ、1頭1頭の個性の違いなど多くの魅力的な側面もあります。実際にクマという生き物を知り、観察し、五感で体験することで、色々な印象を持つことが出来ると思います。そうした経験は、クマとの共生について考える上では非常に大きな意味を持つのではないかと思います。

のぼりべつクマ牧場がクマという生き物に対する魅力の発見の場となり、新たに関心を持つきっかけの場となれば嬉しく思います。十勝の新得町には、自然環境をほぼそのままの形で利用したクマの飼育施設である「サホロベアマウンテン」があり、自然環境に近いクマの行動を観察することができます。ぜひ「サホロベアマウンテン」にも足を運んでいただければと思います。

北海道は世界でも類を見ないほど、ヒグマが高い密度で生息しており、そのような環境を共有していることはとても素晴らしいことと思います。ヒグマとの共生に向け、これからもクマの持つ様々な側面や魅力を伝える取り組みを続けていきたいと思えます。



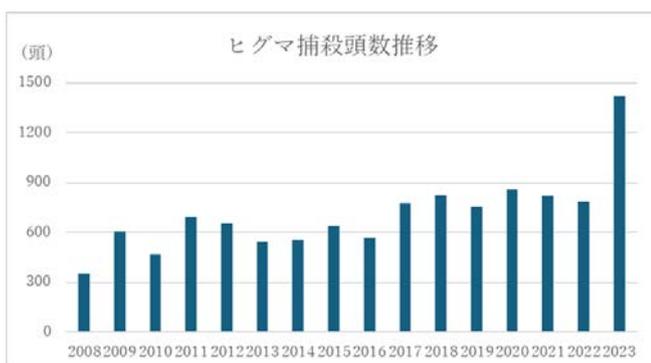
来園者に向けた生態解説イベントの様子



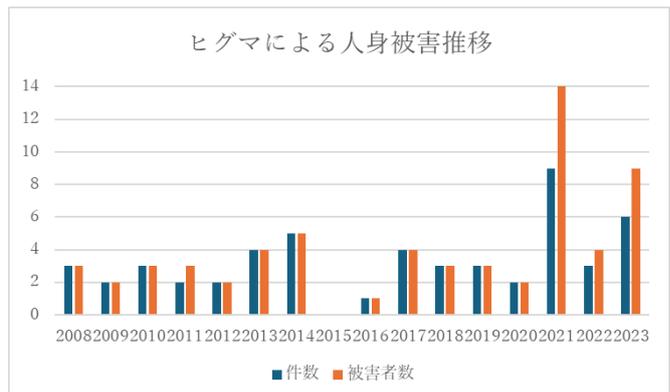
北海道大学との共同研究による人工授精



自然環境型飼育施設「サホロベアマウンテン」



※環境省データをもとに作成



令和6年度 油等汚染事故対策水鳥救護研修のご案内

WRV事務局 二階堂 仁美

日本においては、全国各地で海洋における油等汚染事故が多数発生しています。そのため環境省自然環境局では、油等汚染事故などの発生時に、海洋保全と野生生物保護の観点から迅速かつ的確に対応できるよう、「油等汚染事故対策水鳥救護研修」を例年開催しています。

会員の皆さまには、是非、本研修にご参加いただき、そこで学ばれた事を職場における事前準備や実際の事故対応にお役立ていただきたく、改めてよろしくお願い致します。

研修の詳細案内および参加申込み用紙は、環境省水鳥救護研修センターホームページ、または野生動物救護獣医師協会ホームページからダウンロード可能です。詳しい開催日程が決まりましたら掲載いたしますので、今しばらくお待ちください。ご質問等ございましたら、環境省水鳥救護研修センターまでお気軽にご連絡ください。



日 程：第1回：現場救護リーダー向け 令和6年10月28日(月)、29日(火)
第2回：鳥獣保護行政担当者向け 令和6年11月20日(水)、21日(木)
第3回：現場救護リーダー向け 令和6年12月24日(火)、25日(水)

会 場：環境省 水鳥救護研修センター研修室 (第1～3回研修)
〒191-0041 東京都日野市南平 2-35-2 TEL 042-599-5050 FAX 042-599-5051
HP <http://www.env.go.jp/nature/choju/effort/oiled-wb/>

対 象：国・地方自治体の鳥獣行政等職員、鳥獣保護センター等職員、獣医師、鳥獣保護員、動物園・水族館職員、水鳥救護に携わる関係者等

参加費：無料 (参加のための交通費、宿泊費等は自己負担)

申込先：<https://forms.gle/Pf5k7fq1BseJbrPV8>



上記 URL・QR コードより申し込みができない場合は電話・メールでも受け付けますので水鳥救護研修センターに直接ご連絡ください。

主 催：環境省

請 負：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会 (WRV)



会場となる環境省水鳥救護研修センター



講義の様子



リハビリプールの設置実習



アイガモを使った洗浄実習の様子

「第7回コウノトリの生息地を支える市民交流会」開催報告

日本コウノトリの会事務局長 永瀬 倅 大

令和6年7月14日に、全国各地および韓国から総勢89名の方に参加いただき、3年ぶりに市民交流会を兵庫県豊岡市で開催しました。構成は、(公社)日本動物園水族館協会長・よこはま動物園ズーラシア園長の村田浩一氏、地球環境データコモンズ准教授の安川雅紀氏による基調講演と、各地からの取り組み状況の報告、そして参加者交流です。



村田氏は、地域個体群の遺伝的多様性の低下が絶滅に至る大きな要素であることを、かつての写真「農家と但馬牛と12羽のコウノトリ」に写るコウノトリが、全員兄弟関係であった事実から紹介され、遺伝的多様性の低下や環境攪乱に対応するには、野生復帰が生物多様性の改善や回復に、どのように貢献しているかをしっかり評価する必要があると強調されました。

また、近年の生物多様性と経済の関係の変化についても述べられ、TNFD（自然関連財務情報開示タスクフォース）やネイチャーポジティブが提唱されているように、自然環境の保全が経済活動に不可欠であるという認識が広がり、企業が環境問題にどう向き合うべきかが問われていることを提起されました。



質疑応答の際には、個人としての行動について、「自分の生活が環境に与える影響を見直し、足元から変革を進めることが大切である」と述べられました。

安川氏は、「コウノトリ市民科学」とは、コウノトリの目撃情報を各地域の市民が発信し、その情報を誰もがみられるデータベースとして、ウェブサイトで共有しているシステムであること。市民科学に参加している調査員、報告件数は右肩上がり増加していること。このシステムについては、国内のみならず、オランダや特にフランスからのアクセスが増加していること等も紹介されました。今後の展望としては、DIAS（データ統合・解析システム）のデータを活用することで、気候変動とコウノトリの関係や、餌生物との相互作用を分析することが可能になると説明されました。



<各地からの報告>

[広島県世羅町]

昨年より電柱に営巣しており、今年6月21日に巣立ちが確認されたとのこと。同地では、ナゴヤダルマガエルの保護活動も行われているので、捕食者・コウノトリとの共存の在り方について問題提起されました。また、生物多様性や営巣場所等をめぐっての人間同士のいざこざがあり、それをどう解決するかが今後の重要な課題であると説明されました。出席された世羅町の奥田町長は、少子高齢化の折、子育てのシンボルであるコウノトリが来てくれたことで町民が盛り上がり、豊岡市と4時間しか離れていないので、今後も交流を続けていきたいとあいさつされました。



〔河北潟（石川県津幡町）〕

当地では2年前から繁殖しており、1月1日に発生した能登半島地震後は巣に一時寄り付かなかったものの、4月には繁殖を再開。巣塔近くにカメラを設置し、ライブ映像での観察も行われています。石川県ではコウノトリの飛来数が増加し、現在ではこれまでで最多の数に達しています。



〔関西広告社（兵庫県加古郡稲美町）〕

同社では、社員に健康でおいしいお米を食べてほしいという思いから農業プロジェクトに取り組み、無農薬農業のシンボルとして、コウノトリ保護活動を進めてきました。会社の敷地内に建てられた人工巣塔では、2年前から繁殖しています。その際、巣塔に設置したオブジェによるデコイの効果で誘引できたのでは、と報告されました。



〔韓国〕

韓国では2015年に初放鳥を行い、2016年には72羽の雛が誕生しました。その後、各地でコウノトリの営巣が確認されており、現在、個体数が225羽にまで増加しています。個体数の増加に伴い、コウノトリ愛の会中央会では広報活動やモニタリング、写真撮影者への教育など活動内容が増えてきました。また昨年、対馬に日本コウノトリの会と共同で人工巣塔を設置しました。この取り組みは、今後のコウノトリの保護活動にとって、重要な一歩となると述べられました。



夜の懇親会では、参加者各位が大いに弾けて親密な交流となり、明日への鋭気を養うものとなりました。



戦争で犠牲になる無数の野生生物

今年も8月を迎え、私も戦後生まれとはいえ、昭和20年に起きた広島、長崎への原爆投下、そして敗戦に改めて思いを馳せました。同時に、これまで世界中で起きたあらゆる戦争によって犠牲になられた、すべての方々に対し、衷心より祈りを捧げたいと存じます。

一方で、戦争によって犠牲になってきたのは人々ばかりではありません。核保有国による様々な核実験等も含めて、戦争やテロによって死滅させられてきた野生生物の数はもはや数えるべくもなく、まさに無数と言っていいでしょう。場合によっては、そのために絶滅、あるいは絶滅危惧の状態に追い込まれてしまった種が、いくつもあるかもしれません。戦争とは、地球レベルにおいて、かくも残酷な人的行為であると断言できます。

この地球上に人が存在する限り、悲しいかな、戦争がなくなる日というのは訪れないのかもしれませんが、そこに存在する全生物種のうちの一種として、いつの日か戦争が皆無となる世界の実現のために不断の努力を続けていくことが、私たち人の責務であるに違いありません。それを実現するために、人は永遠に重い十字架を背負って歩まねばならないでしょう。

地球上の全生物種の40億年に渡るこれまでの歩みと歴史に、今さらながら思いを寄せる次第です。

(WRV事務局長 箕輪 多津男)

事務局日誌 2024.6.17～2024.9.16

=== 6月 ===

- | | |
|---|---------------|
| 17: 周辺の除草作業 (環境省水鳥救護研修センター) | 対応: 二階堂 |
| 20: 第2回日本獣医師連盟四役会議 (日本獣医師会会議室) | 対応: 小松 |
| 20,27,28: 東京環境工科専門学校生・野生動物救護実習 (東京環境工科専門学校) [神奈川支部] | 対応: 皆川 |
| 23: 日本法獣医学会・法獣医学研修会 (オンライン) | 対応: 小山 |
| 23: 東京環境工科専門学校生・インターンシップ (犬猫・野生動物救護センター) [神奈川支部] | 対応: 皆川 |
| 25: 令和6年度第1回東京都外来鳥獣(アライグマ・ハクビシン)防除対策作業部会 (Web開催) | 対応: 加藤 |
| 25: WRV ニュースレターNo.129 発行 | 対応: 小松、箕輪、二階堂 |
| 25: 神奈川県野生動物リハビリテーター・県内傷病施設見学会 (野毛山動物園) [神奈川支部] | 対応: 皆川 |
| 26: 第81回日本獣医師会 通常総会 (明治記念館) | 対応: 小松、中川、高橋 |
| 26: 第2回日本獣医師連盟役員会 (明治記念館) | 対応: 小松 |
| 30: 大阪野生動物リハビリテーター養成講座・第1回講習 (中津動物病院) [大阪支部] | 対応: 中津 |
| 30: 稲城市犬の飼い方講習会 (稲城市中央文化センター) | 講師: 小松 |
| 30: 犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部] | 対応: 皆川 |

=== 7月 ===

- | | |
|--|---------------|
| 03~09: わくわく野鳥博 (あべのハルカス近鉄本店)・「鳥のおもしろミニ講座」等 | 講師: 中津 |
| 03: ワイルドマネジメント講座第13回 ((公財)知床自然大学院大学設立財団) (オンライン) | 対応: 小山 |
| 06: 神奈川県野生動物リハビリテーター・県内傷病施設見学会 (野毛山動物園) [神奈川支部] | 対応: 皆川 |
| 08: 厚木市立玉川小学校4年生の学習指導 [神奈川支部] | 対応: 皆川 |
| 08: 鳥獣保護管理法第38条に関する第3回検討会 (環境省・オンライン) | 対応: 小山 |
| 08: 帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習 (上野原キャンパス) | 対応: 箕輪 |
| 09~10: 帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習 (上野原キャンパス) | 対応: 皆川 |
| 11: 帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習 (環境省水鳥救護研修センター) | 対応: 皆川、箕輪、二階堂 |
| 12: 令和6年度日本コウノトリの会・役員会 (Web会議) | 対応: 箕輪 |
| 13: 第86回日本野生動物医学会理事会 (Web開催) | 対応: 羽山、加藤 |
| 14: 東京学芸大学附属小金井中学校常任委員会 (同中学校) | 出席: 新妻 |
| 14: 令和6年度日本コウノトリの会・総会 (豊岡市・あさぎり荘) | 対応: 箕輪 |
| 14: コウノトリの生息を支える市民交流会 (豊岡市・あさぎり荘) | 講師: 村田、対応: 箕輪 |

14,28：犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部]	対応：皆川
16,18：東京環境工科専門学校生・インターンシップ (犬猫・野生動物救護センター) [神奈川支部]	対応：皆川
17：自由民主党動物愛護議員連盟総会 (衆議院第一議員会館会議室)	対応：小松
18：公明党獣医師・愛玩動物看護師議員懇話会 (参議院議員会館会議室)	対応：小松
21：令和6年度第2回わいわいサロン (オンライン) [神奈川支部]	対応：皆川
22：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習 (上野原キャンパス)	対応：箕輪
23~24：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習 (上野原キャンパス)	対応：皆川
25：帝京科学大学・野鳥及び油汚染鳥救護実習 (環境省水鳥救護研修センター)	対応：皆川、箕輪、二階堂
25：令和6年度東京都アライグマ・ハクビシン対策講習会 (東京都庁)	講師：加藤
26：動物園等における高病原性鳥インフルエンザ対応のための講習会 (オンライン) [神奈川支部]	対応：皆川
27：鳥獣保護管理法第38条にかかる特別シボジウム「アーバン・ワイルドライフ対応に求められる技能と体制」(オンライン)	対応：小山
28：大阪野生動物リハビリテーター養成講座・第2回講習 (中津動物病院) [大阪支部]	対応：中津
=== 8月 ===	
03：東松山市五領町自治会 (キツネ、ハクビシン対策：自治会館)	対応：新妻
05：令和6年度環境省水鳥救護研修センター・運営協議会	出席：新妻、箕輪、二階堂
05：第2回東京都獣医師会理事会 (東京都獣医師会会議室)	対応：小松、中川、高橋
11,24：犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部]	対応：皆川
20：サシバのGPS渡りルート調査報告会 (日本鳥類保護連盟・オンライン)	対応：小山
21：O-H-7災害研修 (埼玉・東京・千葉) (オンライン)	対応：新妻
21：令和6年度第1回東松山市環境審議会 (東松山市役所)	出席：小山
22：さっぽろ自由学校「遊」このままでいいの？再生エネルギーの進め方 part14 第4回 (オンライン)	講師：小山
24~25：大阪野生動物リハビリテーター養成講座・第3回講習 (中津動物病院) [大阪支部]	対応：中津、箕輪
26：日本獣医生命科学大学獣医学科4年次野生動物学実習 (日本獣医生命科学大学)	対応：加藤、箕輪
27：第66回日弁連人権擁護大会シボジウム「洋上風力発電の現状の状況と海鳥への影響」(札幌弁護士会・オンライン)	対応：小山
28：令和7年度東京都獣医師会予算要望(都民ファースト・都公明党・都自民党) (都議会会議室)	対応：小松、中川、高橋
28~29：日本獣医生命科学大学獣医学科4年次野生動物学実習 (水鳥救護研修センター)	対応：加藤、皆川、箕輪、二階堂
30~31：環境アセスメント学会2024年度第23回年次大会 (東京農業大学世田谷キャンパス)	発表：小山
=== 9月 ===	
01,15：犬猫・野生動物救護センターにてリハビリテーター活動 [神奈川支部]	対応：皆川
03：令和6年度「ヒナを拾わないで!!キャンペーン」事業報告書提出 (環境省)	対応：箕輪
06~09：日本哺乳類学会2024年度大会 (兵庫県立大学)	対応：羽山、加藤
09：厚木市立玉川小学校2年生の学習指導 [神奈川支部]	対応：皆川
10~13：第167回日本獣医学会・学術集会 (帯広畜産大学)	対応：羽山、加藤
11：第110回日本獣医学会総会 (帯広畜産大学)	対応：新妻
13~16：日本鳥学会2024年度大会 (東京大学農学部キャンパス)	対応：小山、箕輪
14：丹沢大山ボラネット主催講習会「丹沢のツキノワグマについて」(自然環境保全センター) [神奈川支部]	対応：皆川
14：日本環境共生学会・道路生態研究会共催シボジウム「野生動物のロードキル」(ハイブリッド) [神奈川支部]	対応：皆川
14~16：日本野生動物医学会 Wildlife Education Program (WEP) 2 (長野県軽井沢町)	対応：加藤

野生動物救護獣医師協会 (ホームページ) <http://www.wrvj.org/> (E-mail) kyugo@wrvj.org

NEWS LETTER No. 130 2024.9.25 発行

発行：特定非営利活動法人 野生動物救護獣医師協会

事務局：〒190-0013 東京都立川市富士見町1-23-16 富士パークビル302

TEL: 042-529-1279 FAX: 042-526-2556

発行人：新妻 勲夫 編集文責：小松 泰史 編集担当：箕輪多津男